

# LCC（ローコストキャリア）、エアアジアの魅力 Vol.1

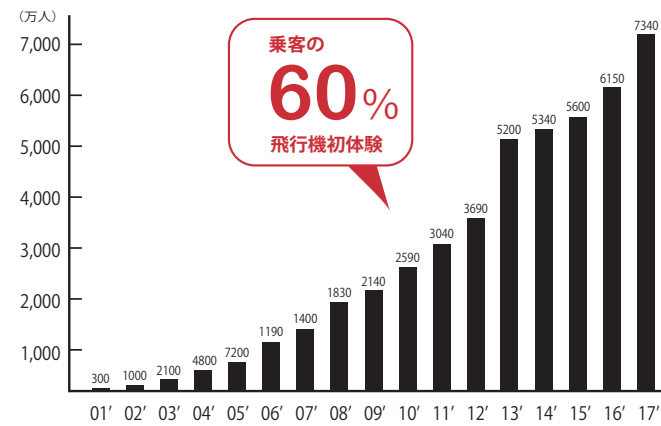
—徹底したエアアジアのビジネスモデルから学ぶ—

三越伊勢丹 HD が来年9月末に相模原店と松戸店を閉鎖すると発表した。百貨店ビジネスも根本的な見直しのときが来ている。多くの日本人は過剰で丁寧なサービスに満足する傾向があるが、その対価として支払っている金額はあまり意識してこなかった。結果、サービスレベルは向上したがコストも嵩み、ビジネス全体に重い贅肉がついてしまい身動きがとりにくい構造となっている。日本企業のビジネスはどれもこの贅肉ビジネス構造で成長してきたといえるのではないか。これから世界で戦うビジネスモデルを考えていくうえで参考にしたい企業として、アジア発のグローバル企業であるエアアジアグループに取材を行った。『エアアジアの魅力』『新たなるビジネスモデル構築』を2号連載でレポートする。

## ■エアアジアグループの成長



トニー・フェルナンデスCEO



(表1) エアアジア乗客数の推移 (エアアジアより入手)

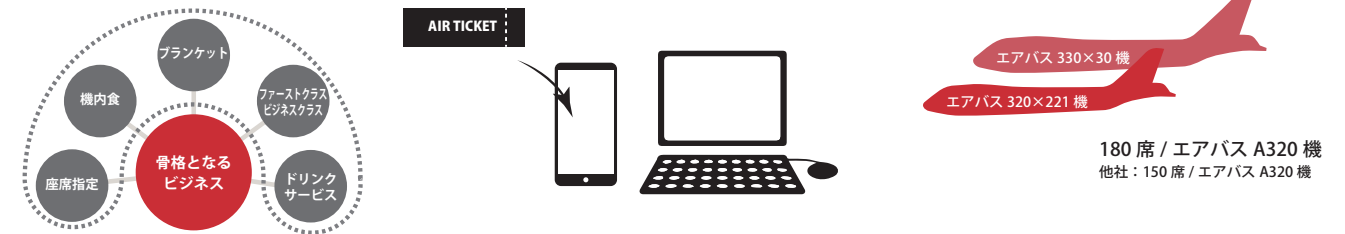
2001年、エアアジアはマレーシアでたった2機の飛行機からスタートした。飛行機に乗ることは特別なことではない“Now Everyone Can Fly”という夢を掲げ、アジア全域、さらにはアジア以外の地域にもネットワークを拡大し、現在ではアジア最大級のLCC（ローコストキャリア）となり、航空業界を牽引するグループへと成長した。タイ、インドネシア、フィリピン、インド、日本でそれぞれに航空会社を設立し、グループで成長を続けている。日本国内においては便数が少なくまだ認知度が低い、アジアでは圧倒的なパワーを持つ企業だ。スタート当時のマレーシアは、マレーシア航空（FSC（フルサービスキャリア））の独占状態であったが、

格安運賃の提供により、マレーシア内に潜んでいた新たなるマーケット（出稼ぎ労働者や、低所得者の旅行など）の顧客を開拓し急成長に繋がった（エアアジア利用の60%が初めて飛行機を利用される方だそう）。エアアジア・グループの成長には、“エアアジア”という名前の通り、アセアン圏（前述5カ国）に設立した会社をグループとして一体運営しているところにある。「One AirAsia」という合言葉とともに国と垣根を越えたつながりを強固にしている。2013年には首都クアラルンプール（KL）のメイン空港の隣に新設された空港『KLIA 2（K.L.International Airport）』の90%をエアアジアグループで独占するほど存在感が高まっている。

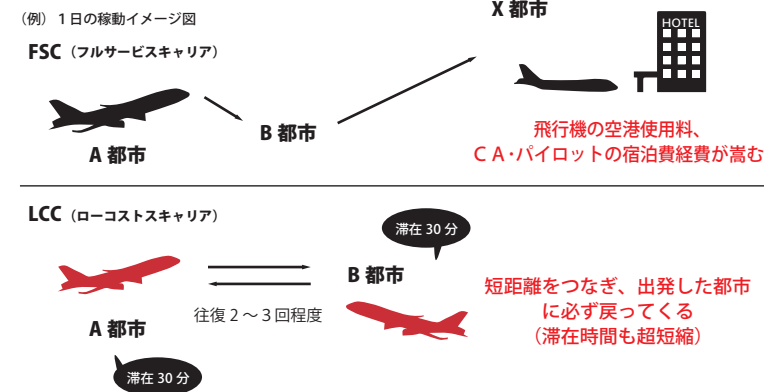
## ■ローコストの徹底的な追求

そのローコストさに驚くなかれ、**関西空港⇄ホノルル・片道：約10,900円**（2018年最安販売価格）と、とにかくびっくりする。その徹底したローコストの戦略は、大きくは下記の5つにまとめた。利用者ニーズの変化など、時代に合わせたものになっており、とても参考になる。

- ①アンシラリー構造（※次月に詳細）
- ②すべて航空券販売はWEBやアプリから
- ③同型の飛行機保有と高密度輸送



## ④短距離高稼働の実現



## ⑤マルチタスク型

客室乗務員は保安要員、サービス要員としての業務のほか、積極的な機内販売や機内清掃など一人何役もこなす。



活気ある「躍動感」を意識しているという。ダンスが得意な方も多い。女性CAはロングヘアが推奨され（お団子は逆にNG）、男性CAは独特のかっこよさがある。アジアの活気と魅力が存分に出ており、顔つきには意識の高さを併せ持つ。

## ■アジア戦略を強化し日本の空も変わる

日本の航空業界は規制などから、エアアジアは2011年に参入後一度撤退している。しかし、フェルナンデス氏は日本マーケットの魅力から2014年に新しい手法で再参入を果たした。まだ日本発着便は少ないが、今後便数を増やしていくという。日本のLCCのほとんどがJAL、ANA傘下で、飛ぶ便数も限られているため、LCCの魅力は伝わりづらい。エアアジア・ジャパンが日本展開を強めていけば、日本の空事情も大きく変わっていくはずだ。

社会の変化に合わせて成長するエアアジアは止まらない。次号では、そのビジネスモデルに着目し考察する。

## ☆LCCでの賢い旅スタイル☆



JAL、ANAなどのフルサービスキャリアに甘やかされている日本人にとって、LCCの飛行機に乗ると、席間隔の狭さや、毛布の支給のないこと、映画が見れないことなど、色々と感じること多い。

しかし、それもすべて“考え方のリセット”が必要だ。気になる部分は、アイマスク、耳栓、寒さは圧縮ダウンでカバーし、荷物預けもやめて、映画はiPadで楽しむ。身軽でスマートなフラッシュパッカー（リュック1つとケータイはハイスペック※バックパッカーとは異なる）で海外SIMのケータイ片手に渡航先ではキャッシュレスにUBERも乗りこなし、気楽に飛び回る。ホテルはハイグレードとメリハリを利かせ、気楽な旅行スタイルがこれからのオススメだ。